

【講演会等報告】

北大文学研究科公開シンポジウム「サハリンの言語世界」

山田祥子

開催日：2008年9月6日

開催場所：北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W202 教室

主催：北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター

後援：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

北海道の北に隣接する島サハリンでは、大きく分けてニヴフ語、アイヌ語、ウイльта語という互いに系統の異なる三つの言語が歴史的に共存してきた。いずれの言語も、近代以降ロシア語や日本語といった大言語の勢力下で話者数が減少し、今日では消滅の危機に瀕している。そのようななか、それぞれの記録・研究・保存の取り組みが進められている。また、近年では、これらの先住民族言語を含めた複数の言語を横断的に比較・検討する、よりスケールの大きな類型的研究も注目を集めている。

2008年に米寿を迎えた池上二良氏（北海道大学名誉教授）への祝意を込めて企画されたこのシンポジウムには、サハリンの言語を専門とする研究者が全国各地から集結した。さらには海外から A. M. ペヴノフ氏（ロシア科学アカデミー言語学研究所主任研究員）を迎え、資料紹介・研究報告を含む計12件の発表を各30分、三つのセッションに分けて行った。以下ではまず、各発表の内容を簡単に紹介する。

《第1セッション》

◇ 津曲敏郎（北海道大学）「サハリンの言語世界：単語借用から見る」

このシンポジウムの趣旨説明も兼ねて、サハリンの言語状況の概要と単語借用の事例を報告し、全体のテーマ「サハリンの言語世界」へと導入した。単語借用については、ニヴフ、アイヌ、ウイльтаの三つの言語で同源と見られる単語の例をいくつか、池上氏の研究をもとに紹介した。また、セイウチを表わす単語が、遠くチュクチ・カムチャツカ語族からかたちを変えて伝播してサハリンに至ったとするスケールの大きな仮説を新たに提示し、サハリンを一つの言語地域として言語間の相互影響を考える研究の可能性と発展性について述べた。

◇ 山田祥子（北海道大学）「ウイльта語北方言調査の課題と展望」

ウイльта語は大きく北方言・南方言の二つの方言に分けられる。しかしその具体的な差異はこれまであまり明らかにされてこなかった。この発表では、池上氏による記述をもとに、方言差にかかわるいくつかの問題をあげ、とくに北方言の資料を補う必要があることを強調した。また、二つの方言の形成にはウイльтаに隣接する諸言語との接触もかかわっているという見通しとともに、池上氏による先行研究を基礎とする今後のウイльта語研究の方向性を示した。

◇ 朝日祥之（国立国語研究所）「ウイльта語・ニヴフ語話者の日本語樺太方言に見られる特徴」

日本語の方言研究の視点から、日本語とサハリンの言語との接触を扱った。日本語樺太方言は、1905～1945年にかけて日本領樺太で形成された日本語の地域変種である。この形成過程で日本語教育を受けたウイльта語・ニヴフ語話者の話す日本語樺太方言のアクセントについて、朝日氏が2003年からサハリンで行っている調査結果の一部を報告した。現段階では、話者の

言語的背景による差異よりも「個人による差異」が顕著になってきているという。

◇ 笹倉いる美（北海道立北方民族博物館）／篠原智花（音楽家）「道立北方民族博物館所蔵の服部健博士旧蔵資料について」

ニヴフ語の研究者として知られる服部健博士は、戦前、度重なるフィールド調査を行いサハリンの言語・文化にかんする資料を数多く残している。1994年に道立北方民族博物館に寄贈された資料には、ニヴフ語だけでなくウイльта語の記録も少なからず含まれている。この発表では、「服部文庫」とよばれるこの資料の概要と、内容例として民謡や楽器演奏の音声を紹介した。服部文庫の一部は同博物館研究紀要で公開されているが、大部分は現在も整理中で公開にいたっていない。整理作業や資料の活用に、研究者の積極的な関与が望まれる。

《第2セッション》

◇ 佐藤知己（北海道大学）「アイヌ語の条件表現について」

日本語の条件表現（レバ、タラ、ト、ナラ）との対照によって、アイヌ語の条件表現（ciki, kor, akusu, yak, yakun）の用法の整理を試みた。どちらの言語の条件表現も文末のモードとのかかわりを示す点が注目されるが、細部の条件は微妙に異なり複雑な対応関係を示す。アイヌ語においてはとくに yakun という形式が相対的に広い用法をもつ。また、「命令」「疑問」のモードを文末に指定する条件表現（ciki, kor）もアイヌ語に特徴的である。今後の記述に際して、これらの点に注意が必要であると述べた。

◇ 高橋靖似（北海道大学）「アイヌ語サハリン方言の証拠性表現」

アイヌ語サハリン方言の証拠性（evidentiality 情報の出所にかんする範疇）にかかわる表現のうち manu という形式について、ダイクシスの理論を取り入れて検討した。manu はアイヌ語サハリン方言の口頭文芸テキストのなかで文や節の末尾に多用され、従来「伝聞」を表わすと解釈されてきた。しかし、この解釈だけでは manu が一人称主語の文でも用いられるという事実を説明できない。そこで、従来の解釈にダイクシスの観点を加え、一人称主語と manu が共起した用例は、話し手の基準点から談話の中の登場人物（1人称形式）の行為を表現していると指摘した。

◇ 中川裕（千葉大学）「アイヌ語の接頭辞度」

アイヌ語の語形成において接頭辞・接尾辞のどちらが優勢かという問題について、近年の類型論的研究の基準を取り入れて数値的に検討した。その結果、中川氏はアイヌ語が（接尾辞よりも）「接頭辞をより好む」言語であると指摘する。これは、圧倒的に接尾辞優勢の言語が多いユーラシア北部の地域においては特異な性質を示すものであり、むしろ、より南方に位置する言語との共通性を見せているという。そして、この説明には今後歴史的な解釈を加える必要があるだろうという見解を述べた。

◇ 村崎恭子（元横浜国立大学）「樺太アイヌ語の数詞について」

1994年まで村崎氏自身が行っていた調査にもとづくデータと、さらに18世紀まで遡る古い資料を駆使して、アイヌ語サハリン方言の数詞の体系とその歴史的变化を報告した。一般に、アイヌ語の数詞法の基本は20進法である。サハリン方言でも、1787年に記録された最古の資料では20進法が確認される。ところが、19世紀後半から少しずつ10進法が行われるようになり、現代では20進法ではなく10進法だけが使われているという。このようにアイヌ語のなかでサハリン方言に特有の変化がどのような経緯で起こったのか、参加する研究者に問題を投げかけた。

《第3セッション》

◇ 白石英才（札幌学院大学）「ニヴフ語における CVCVC 語形と CVCC 語形の交替について」

ニヴフ語では、CVCVC という語形から第2音節の母音が脱落して CVCC に交替する例が多く見られる（C：子音、V：母音）。白石氏は、こうした現象について、末尾の子音のあとに「空の母音」（発音されない母音）があると仮定し、全体が3音節になるのを避けるためにアクセントのない第2音節の母音を脱落させているという音韻解釈を述べた。これにより、英語などさまざまな言語で用いられる一般音韻論の規則が、ニヴフ語にも同様に適用されることを明らかにした。

◇ 丹菊逸治（和光大学）「ウラディーミル・サンギ氏録音による 1970 年代のニヴフ語音声資料について」

ニヴフ出身の作家・詩人として知られる V. サンギ氏録音によるニヴフ語音声資料を紹介した。これは 1970 年代に同氏がオープンリール式録音機で口承文学を記録したもので、2003 年にその一部が東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所でデジタル化された。多用なジャンル、語り手と聞き手がそろった「語りの場」、サハリン東海岸のニヴフ語方言などの情報が豊富に含まれる、非常に貴重な資料である。今後の口承文芸研究およびニヴフ語研究に広く活用されることが期待される。

◇ 金子亨（千葉大学）「ニヴフ語抱合再論」

1954～1966 年にソ連科学アカデミー言語部会レニングラード支部で起こったニヴフ語の抱合にかんする論争を再考した。この論争は、終始ニヴフ語が「抱合的」であるか「膠着的」であるかという問いをめぐって行われた。しかし、これは当時のソ連における学問の孤立と立ち後れを背景として、理論的にも資料的にも実証性を欠く論議であった。金子氏は、新たなニヴフ語資料を参照し、ニヴフ語は動詞接頭要素が「抱合的」であるのに対し、接尾辞連鎖が「膠着的」であり、この接辞結合が互いに矛盾することはないと考察した。

◇ A. M. ベヴノフ（ロシア科学アカデミー言語学研究所）「ロシア・日本の共同によるウイルト語・ニヴフ語の記録と研究」

消滅の危機に瀕した各言語の状況や、ニヴフ語・ウイルト語それぞれに特有の諸問題に言及したうえで、今こそロシアと日本の研究協力が必要であると提言した。これまで両国の研究協力は、1990～1991 年に村崎恭子氏を代表として行われた合同調査や、2008 年に池上二良氏を筆頭編者として出版されたウイルト語文字教本に成果が見られる。これからは、過去に採録された資料のデータベース化、現地調査、総合的な辞書の編纂などを協力して行っていくことで、サハリンの言語のさまざまな問題を解決し、その記録・研究の可能性を開くことができると力強く主張した。

以上の発表が、この日の午前から夕方まで続いた。その内容は概して専門的だったにもかかわらず、聴衆のなかには学生や教員だけでなく一般の来場者も多く見られた。この背景には、サハリンの先住民族言語への関心だけでなく、高名な先生方から若手の研究者まで、この分野の研究で最前線と目される発表者が名を連ねたゆえの注目度の高さもあろう。

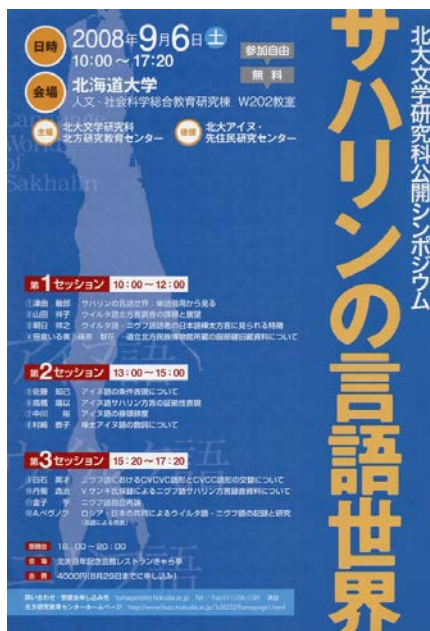
各制限時間内での質疑応答の余裕は少なかったが、その分、晩に大学構内で催された懇親会では時間を忘れたように活発な議論が交わされた。出席者の何人かはマイクを取って、サハリン調査旅行にまつわるエピソードや池上教授との思い出などを語り、一同感慨にひたる

場面もあった。これを機に、今後ますます研究者の交流が深まり、情報・意見交換が盛んになることを期待したい。

冒頭に述べたサハリン先住民族言語の危機は、その調査・記録を次第に難しいものになっている。だからこそ、わずかでも話者のいるうちに、話されている現場に行き行って記録することが重要である。また、過去に記録された資料を整理・把握し、これからの研究に役立てることも、今の研究者に与えられた義務であり特権であるといえよう。一方で、日進月歩の情報技術や一般言語学の理論をこの分野に取り入れていくことも怠ってはならない。ペヴノフ氏が提唱したロシアと日本の研究協力は、そうした記録・研究の成果をますます高めていくことだろう。そして、その成果の積み重ねのうえに、言語間の比較や対照、歴史や人類学など隣接するさまざまな学問分野への応用といった可能性が開かれる。「サハリンの言語世界」は、今まさに拓がりを見せようとしているところなのである。

なお本シンポジウムの報告書として、『サハリンの言語世界：北大文学研究科公開シンポジウム報告書』（津曲敏郎編、北大文学研究科北方研究教育センター、2009年3月）が刊行されている。

(やまだ・よしこ／北海道大学大学院文学研究科 博士課程)



シンポジウムのポスター



会場風景